青銅器総合研究会の設立

富山大学芸術文化学部教授　三船　温尚

1．経緯

2013年４月の芸術文化学部の研究部会議において、学部内の異分野教員が参画する研究会を立ち上げ、学際的研究や新領域研究の推進を目指すこととなった。芸術文化学部は１学科５コース制で、研究は教員個々でおこなってきたが、それぞれの研究会で、個々の研究の新たな展開を組織的に支援しようとするものである。

鋳造技術者である筆者は、1992年に開始した中国古代鋳造技術の調査成果を学部前身の高岡短期大学紀要論文で３件発表した。それを基として、1996年に、高岡短期大学公開講座「中国古代の鋳造技法を探る－考察と鋳造実験－」を開催した。これは、考古学研究者を対象としたもので、中国青銅器や東アジア青銅鏡研究の著名な専門家が全国から定員を超えて集まり、見学だけという研究者も多く来学した。論文わずか３件の駆け出し研究者の講座に何故、という感じであったが、鋳造技術研究の需要の高さを感じた。朽ちず残る青銅器の技術は重要な研究対象であるが、それまで、鋳造技術者が考古学の中に飛び込むことはなかった。考古学者が鋳造職人に教えを受けて、考古学者が机上で推論を進めていた。青銅遺物を実際に見たことがない職人に、鋳造経験がない考古学者がおこなう質問から得られるものが、どれほどのものであったか想像できるが、技術者と考古学者が協働でおこなう古代技術の研究は待ち望まれていた。

古代中国を中心とした東アジアは、世界でも青銅器文化が最も花開いた地域である。1992年当時、中国では古代青銅器技術研究は、盛んではなかったが、その10年後、いよいよ中国でも研究に取り組み始めた。韓国は、青銅器研究者は今も多くはないが、研究は進められていた。日本では、特に青銅鏡研究者が多く、技術研究を進めていた。中国の古代鋳造は陶製（土製）鋳型、石製鋳型、金属製鋳型が用いられた。現代の日本では、陶製鋳型は梵鐘や茶釜の鋳造にみられるだけになった。石製鋳型は錫器鋳造などにわずかに残り、金属製鋳型は工業鋳物で盛んに用いられている。古代では、石と金属鋳型は単純形状・単純文様製品の量産に用いられ、主は陶製鋳型であった。現代の日本には真土型（まねがた）という、梵鐘や茶釜を除く伝統的な陶製鋳型法が美術鋳造を研究する大学にかろうじて残る。1985年ころは、高岡銅器製造現場にも幾つかこういった真土型工房があったが、今は、粘土の代わりにほとんどが樹脂などで砂を粘結し鋳型焼成しない近代的技法に移行した。中国、韓国では早くから陶製鋳型がなくなり、真土型を学びに日本に留学する学生も少なからずいる。陶製鋳型を研究する日本の大学は、東アジアにおいて、こういった面から注目される状況にある。

公開講座の直後、奈良県立橿原考古学研究所、滋賀県立大学と、高岡短期大学の研究者８名で、「二上古代鋳金研究会」を立ち上げ、主に青銅鏡技術研究を進めた。考古学、鋳造技術、金属材料の研究者が、それぞれの疑問点を挙げ議論する中で、その分野の研究では当たり前で問題にもしなかったことが、研究対象になることもあった。2007年までには、海外調査、鋳造実験、金属組織分析などの手法で、鏡の面反り、内部腐食、踏み返し鏡、石製鋳型調査など16件の論文、１件の著書（中国社会科学院考古研究所との共同調査で、『山東省臨淄斉国故城漢代鏡范的考古学研究』科学出版社（中国北京）発行）の成果をあげていた。この年に、研究会を解散して、「アジア鋳造技術史学会」を設立した。立ち上げ総会は前身の高岡短期大学キャンパスで行い、全国から50名もの出席があった。やはり、古代鋳造技術研究の需要は高かった。先行して日本国内学会を立ち上げ、直ぐに中国、韓国を加えて国際学会とした。2008年には日本学術会議協力学術研究団体に申請し承認された。2013年10月に、会員は、日本151名、韓国48名、中国43名、インド３名、イタリア１名の、合計246名に膨らみ、学会誌や大会発表で、各国の研究交流が促進され、東アジアの鋳造技術史研究を牽引している。現在の各国の主たる青銅器研究者はほぼ入会し終え、考古学、美術史、民俗学、金属材料学、芸術系などの大学院博士課程などの学生の入会が続いている。古代ガラスの鋳造研究をする大学院生も入会し、青銅分野に止まらず領域を広げている。1992年に始めた中国古代青銅器調査研究から今年

で20年が経過した。公開講座、二上古代鋳金研究会を経て、アジア鋳造技術史学会発足後６年が経過した今、ようやく世界の鋳造技術史研究の拠点が整備され、安定した学会運営の軌道に乗りつつある。

２．研究会目的

アジア鋳造技術史学会の活動は、考古学、歴史学、民俗学に関わる鋳造の技術史研究であり、世界的な視野で行われる研究である。学会誌や大会発表を主として交流するが、これとは異なり、富山大学芸術文化学部教員が、身近な問題を持ちより研究する小回りのきく会として、「青銅器総合研究会」を設立した。この研究会で取り上げ研究した成果は、多く学会誌で発表することになる。学部のある高岡は日本有数の青銅器生産地であり、400年の歴史を有する。この地場産業を地域の文化資源と捉えて研究することも研究会の領域とし、学会よりも幅広い研究分野の教員に参画いただいた。青銅器総合研究会の「総合」には、今後、多くの新たな内容が含まれていくことを期待している。2013年４月時点の会員は、大熊敏之（美術史、工芸・デザイン史、文化資源政策論：芸術文化学部）、金岡省吾（地域政策：富山大学地域連携推進機構、地域づくり・文化支援部門）、古池嘉和（文化経済学：芸術文化学部）、三宮千佳（仏教美術：芸術文化学部）、島添貴美子（民族音楽学、伝統文化論：芸術文化学部）、清水克朗（鋳造技術：芸術文化学部）、長柄毅一（文化財科学、金属材料工学：芸術文化学部）、中村滝雄（鍛金技術：芸術文化学部）、ペルトネン純子（鍛金技術：芸術文化学部）、三船温尚（鋳造技術：芸術文化学部）、村田 聡（油脂材料：芸術文化学部）の11名である。

３．研究活動

2013年４月に立ち上げた研究会で、同年８月までに、２回の研究発表会を開催した。

・第１回研究会

名称：『古代青銅器技術研究から21世紀の青銅器展開へ』
日時：2013年５月26日（日）13：00～
会場：富山大学 芸術文化学部　H棟282教室
発表者・内容：鄭東平・肖珍（銅陵新九鼎銅文化産業有限公司）「中国銅陵国際銅彫芸術展」、清水克朗「高岡銅器の歴史と技術」、長柄毅一「高錫青銅の材料科学」、三宮千佳「東アジア小金銅仏の発生と変遷」、森崎琢磨（富山大学 芸術文化学部 研究生）「近代日本の伝統的大型鋳造技術」、万俐（南京博物院文物保存科学技術研究所所長）「南京博物院藏戦国透空蟠龍紋青銅器」

万俐氏は急遽来日が不可能となり、論文のみの参加となった。鄭東平氏は、2012年アジア鋳造技術史学会の愛媛大会で発表のため来日し、三船と意見交換し研究交流を持った。万俐氏は2011年の奈良（橿原）大会で、三船と研究交流し現在も共同研究が継続している。鄭東平氏は安徽省銅陵市に巨大な青銅彫刻公園整備を政府から依頼され、世界の彫刻家の作品の鋳造、組み立て、公園設置を引きうけている。鄭東平氏の発表には、マケット審査や原型拡大、鋳造などの工程写真が含まれ、中国の現在の技術、商品状況などが紹介された。他の研究発表に対しては、鄭東平氏からの質疑と応答で、異分野研究交流の意義を実感した。

・第２回研究会

名称：『薬師寺東院堂 聖観音菩薩立像の周辺』
日時：2013年６月11日（火）18：15～
会場：富山大学 芸術文化学部 文化マネジメント演習室
発表者：三宮千佳

2013年４月26日～６月23日、石川県立美術館で開催の『国宝 薬師寺展』に出品された古典青銅彫刻の傑作、国宝 聖観音菩薩立像を中心に、日本の古代仏教美術の研究発表をおこなった。今回の美術館の展示は、薬師寺の厨子から出され、ガラスケースなしでの展示で、床から30cmほどの高さに設置され、至近距離から側面、背面の観察が可能で、調査には極めて好条件であった。三宮千佳氏の発表で、聖観音菩薩立像の技術研究の視点が明確になり、三宮、三船の共同研究で聖観音菩薩立像鋳造技術に関する学会発表を予定している。

４．今後の活動計画

今後は、高岡銅器に関連した新たな研究展開ができないか検討中である。これまで、高岡銅器は産業史研究が為され、近年は商品開発、デザイン研究が主となっている。高岡銅器の産業の側面とは別に文化の視点から将来的な展開を研究することができればと考えている。高岡短期大学で立ち上げたアジア鋳造技術史学会、富山大学芸術文化学部で立ち上げた青銅器総合研究会が、ともに併存発展し、世界の青銅器研究をリードすることを期待している。会員個々の研究や、現在計画中の研究を順次発表し、研究会成果をあげていく予定である。地元銅器業界の方々も研究発表にご出席いただければ、さらに、研究成果が広がり展開できると思われる。